歴史探訪

「うつくしま」への系譜

隠されたオランダ人 ファン・ドールンと安積疏水が築いた絆

猪苗代湖の豊かな水を安積原野（郡山市）に導き、荒野を美田に変えた「安積疏水開削」に力を尽くしたオランダ人技師ファン・ドールンの像が、湖畔の十六橋水門そばに建っています。戦時中、金属類の強制供出の運命が待っていた像を守ろうと、決死の思いで隠し、守り通した人々がいました。ここでは、当時その決断を下した渡辺信任（のぶとう）の甥（おい）で、実行部隊の一人のご子息でもある、安積疏水土地改良区副理事長の遠藤直人さんにお話を伺いながら、時を超えて守り通した大切な心に想いをはせてみました。

■開拓に不可欠な水を導く

現在、中核市として大きな飛躍を続け、全国第2位の米生産高を誇る郡山市。その発展はすべて「水」から始まりました。明治維新のころ、「安積開拓」において、安積疏水の開削は不可欠のものでした。当時の安積原野は不毛の地。猪苗代湖の水は西の会津盆地を潤しましたが、東の安積原野には一滴も流されることはなかったのです。

明治維新後、新政府は、失業した士族の救済のため、開墾地を検討していました。そんな状況の中、政府は猪苗代湖の水をかんがいに利用することを考え、明治初年から調査を開始。明治11年（1878）には、オランダから招いた土木設計技師ファン・ドールンを郡山地方に派遣し、本格的に開削事業の可能性を検討、実地測量を行ったのです。

この時、ドールンがまず考えたのは、会津の日橋（にっぱし）川の入り口に「十六橋水門」を整備することでした。湖の反対側である安積疏水の開削のために、なぜこの整備が第一に必要と考えたのか――。このことについて遠藤さんは、「今まで湖の水を利用してきた会津盆地の農民を決して困らせてはいけない。そう考えたのです」と話します。湖の水位が変わっても会津側へ流れる水に影響を与えずに、安積原野に必要な水を引き入れる。その水位の調節のために作られた十六橋水門の役割は「湖のダム化」でした。アムステルダムという都市名が示す通り、低地にある彼の母国オランダは河川や水利に関する土木技術は世界一。ドールンの設計に基づく安積疏水工事は、明治12年（1879）に開始され、高度な指導のもと、政府派遣の技術者や福島県内の技術者が活躍。3カ年の月日を要し、明治15年（1882）に完成しました。そして、年月がたってもこの恩人のことを忘れなかったのは、農民たちでした。

会津の日橋川入り口にある十六橋水門は、安積疏水の開削に伴い、会津側に流れる猪苗代湖の水量を調節するためにつくられました

明治15年（1882）、沼上隧道（ずいどう）が通水。それは、奥羽山脈をトンネルで貫き、猪苗代湖の水が初めて安積原野に導かれた瞬間でした

猪苗代湖畔に建つファン・ドールン像。足元をセメントで固めた「傷跡」は、戦時中の金属類の強制供出から守ろうと、農民たちの手によって運び出された際に出来たものです

安積疏水開削の際に使われたトランシット（測量器械）

■恩義を胸に、隠された銅像

永年の夢だった猪苗代湖からの引水を目にした農民たちは、手を握り合い、皆が涙を流したと言われます。そして、全国から入植した士族や小作人たちの労苦により、荒野は美田と化していったのです。農民たちは、「孫子の代までドールン先生を語り継ごう」と銅像建立を働きかけ、昭和6年（1931）、ゆかりの十六橋水門わきに建立しました。

ところが第二次世界大戦で戦火が強まる中、軍事用に役立てるために金属類の強制的な供出が始まりました。しかもドールンの母国オランダは敵国の連合軍側。銅像にも供出の運命しか残されませんでした。遠藤さんは「しかし、敵とか味方とかは関係ありません。農民がドールンに大きな恩義があることは、決して変わらないのですから」と語ります。銅像を隠そう――そんな覚悟を決めたのは、安積疏水土地改良区理事長の渡辺信任でした。もちろん、それが憲兵に見つかったら大変なことです。そこで密かに銅像を運び山中に埋める実行部隊が集められました。遠藤さんの実父もその一人でした。「実行の日のことはよく覚えています。夜、だれにも見られないように大きな重い銅像を台座からはずし、杉林の中を運んで土の中に埋めたと聞かされています」と、遠藤さんは振り返ります。その後、関係した人々は何度取り調べを受けても「銅像のことは知らない」と主張し続け、恩人を守り通しました。

そして敗戦を迎え、眠り続けたドールン像は昭和21年（1946）に掘り起こされました。作業をした人たちは「ドールン先生は骨にならないで生きていた」と大喜びしたと伝えられます。こうして再び猪苗代湖畔に立ったドールンは、自らの事業を永遠に見渡すこととなったのです。

安積地方へ取水する上戸（じょうこ）取水口の前で往時を語る遠藤さん。「疏水が整備されるにつれ、開墾地の畑地は水田へと変わり、かんがい面積が増加していきました」

現在の十六橋水門。その歴史的景観をとどめようと、改修・整備が図られています

■時を超え国を越えた信頼関係を

厳しい戦時下にあって、ついに守り抜かれた銅像――。それを成し遂げたのは、安積原野を真に切り拓いた農民一人ひとりの誇りと、恩人への厚い感謝の想いでした。

その想いが、恩人を砲弾に変えるのを防ぎ、国と国を結ぶ架け橋へと広がりました。日本でのドールンの功績と、その銅像にまつわる秘話がオランダ国王にも伝わり、ほとんど地元では知られていなかったドールンの名が、オランダ国内でも知られることとなったのです。昭和54年（1979）、郡山市は温かい市民の募金により、オランダのアムステルダム市に、無縁仏寸前の状態だったファン・ドールンの墓碑を再建しました。ドールンが安積原野の地を踏んで一世紀後、郡山とオランダの交流が広がったのです。さらに郡山市は、昨年9月、21世紀以降の新たな友好のあかしに、ドールンの生誕地であるブルメン市が建立した記念碑の除幕式に出席しました。そしていま、安積疏水開削の礎となった十六橋水門は、その歴史的景観をとどめようと、改修・整備が図られています。

大地を潤し、工業用水、生活用水としても使われる安積疏水は、いまの郡山を築き上げた源流です。この目ざましい発展も、国際交流の広がりも、「戦争によって破壊されなかった大切な心」が礎となったことを、忘れることはできないでしょう。ファン・ドールン像の足元をよく見ると、そこにはセメントで補強した傷跡があります。「この足は、銅像を隠すために台座からはずした時に壊れたのです」と、遠藤さんは話します。ドールンと農民を強い絆（きずな）で結んだ銅像の生々しい傷跡は、戦火を乗り越えた熱い心のあかしであり、それが今日では、オランダとの強い絆のあかしとなりました。二度と像がはずされることなく、国を越えたかけがえのない信頼を築き上げてほしい――ドールンの像は、わたしたちに、そう語りかけているのかもしれません。

安積疏水の分水路（郡山市熱海町）。疏水により農工業用水から生活用水まで確保された郡山地方は、その後大きく発展しました

安積疏水完成時につくられた人工の滝「麓山の飛瀑（ひばく）」。単なる観賞用ではなく、製糸業の動力源として利用するために造られました。現在もその形をとどめ（写真下）、今年3月に、学術上貴重な近代建造物の保護を目的とした登録有形文化財に選定されました

郡山市は昨年9月、姉妹都市のオランダ・ブルメン市が21世紀以降の新たな友好のあかしに建立した記念碑の除幕式に出席しました